

黄州に着いて三年目の元豊五年（一〇八二）陰曆七月十六日、蘇軾は長江に小舟を浮かべ『三  
国志』にちなむ赤壁に遊んだ。古戦場の蒲圻（ほき）「武の赤壁」ではなく、湖北省黄冈県赤鼻磯  
にあり、蘇軾の文名によって名付けられた「文の赤壁」である。同じ年の十月に再びここを訪れ  
「後赤壁の賦」を作っているの、ここに記載の賦を「前赤壁の賦」とも呼ぶ。

「賦」は戦国時代の『楚辞』の流れをくんで、漢代に完成の域に達した文学形式の一つで、韻  
文の形をとるが、一句の文字数にも韻を踏む事にも規則はない。宋代になって、歐陽脩が散文的  
な新しい「賦」の基礎を作り、東坡この師の教えを受けた。「赤壁の賦」は東坡散文の代表作である。

## 前赤壁賦

前赤壁の賦

壬戌之秋

壬戌の秋

七月既望

七月既望

蘇子与客泛舟

蘇子 客と舟を泛べて

遊於赤壁之下

赤壁の下に遊ぶ

清風徐来

清風徐に來たりて

水波不興

水波興らず

舉酒属客

酒を舉げて客に蜀め

誦明月之詩

明月の詩を誦し

歌窈窕之章

窈窕の章を歌う

少焉月出於東山之上

少焉にして 月 東山の上に出で

徘徊於斗牛之間

斗牛の間に徘徊す

白露橫江

白露 江に横たわり

水光接天

水光 天に接す

縱一葦之所如

一葦の如く所を縦にして

凌万頃之茫然

万頃の茫然たるを凌ぐ

壬戌（元豊五年）の秋、  
七月十六夜（既望）、  
私は客と舟を浮かべて、赤壁の  
もとに遊んだ。

清らかな風がそよそよと吹き、  
川の面に波も立たない。

酒をとり客に勧め、

明月の詩を朗誦し、

『詩経』の窈窕の章をうたう。

しばらくすると、月が東の山の  
上に出、斗宿（南斗星）と牛宿  
（牽牛星）の間をゆきつもどり  
つする。

露の気が長江の水面に広がり、  
月光を受けた流れがはるかに  
水平線で空に接している。一本  
の葦のような小舟をそのままに  
漂わせ、はるか彼方の広がりへ  
と乗り出してゆく。

浩浩乎如馮虛御風

浩浩乎として虚に馮り風に御して

而不知其所止

其の止まる所を知らざるが如く

飄飄乎如独立

飄飄乎として世を遺れて独り立ち

羽化而登仙

羽化して登仙するが如し

於是飲酒樂甚

是に於て酒を飲んで楽しむこと甚だし

扣舷而歌之

舷を叩いて之れを歌う

歌曰

歌に曰く

桂棹兮蘭漿

桂の棹 蘭の漿

擊空明兮泝流光

空明に撃ちて流光を泝る

渺渺兮予懷

渺渺たる予が懐い

望美人兮天一方

美人を天の一方に望むと

客有吹洞簫者

客に洞簫を吹く者有り

倚歌而和之

歌に倚りて之れに和す

其声嗚嗚然

其の声嗚嗚然として

如怨如慕

怨むが如く慕うが如く

如泣如訴

泣くが如く訴うるが如し

余音嫋嫋

余音嫋嫋として

不絶如縷

絶えざること縷の如し

舞幽壑之潜蛟

幽壑の潜蛟を舞わしめ

泣孤舟之嫠婦

孤舟の嫠婦を泣かしむ

蘇子愀然正襟

蘇子 愀然として襟を正し

広びろと空を行き、風に乗り、どこまでも止まらないかのように、

ふわふわと俗世を忘れてスツクと立ち、羽が生えて仙人となり、天に登るかのよう。

そこで、酒を飲み、大いに楽しむ。舟べりをたたき、歌をうたう。

その歌にいう。

『木犀のさおと木蘭かい、水面の月影をうち、光るさざ波をさかのぼる。はるかに馳せるわが想い、

思う人を天の一方に、はるかに望む』と。

客の中にたて笛を吹く人がいて、歌に合わせて奏でる。

その笛の音は響きわたり、怨むように、慕うように、泣くように、訴えるように、

余音は細く長く響き、糸のように絶えない。

奥深い谷に隠れひそむみずちさえ舞わせ、孤独な舟の寡婦をも泣かせる。

私は顔色を変え、襟を正して、

危坐而問客曰

危坐して客に問いて曰く

何為其然也

何為れぞ其れ然るやと

客曰

客曰く

月明星稀

月明らかに星稀に

烏鵲南飛

烏鵲南に飛ぶとは

此非曹孟徳之詩乎

此れ曹孟徳の詩に非ずや

西望夏口

西のかた夏口を望み

東望武昌

東のかた武昌を望めば

山川相繆

山川相繆い

鬱乎蒼蒼

鬱乎として蒼蒼たり

此非孟徳之

此れ孟徳の

困於周郎者乎

周郎に困しめられし者に非ずや

方其破荊州

其の荊州を破り

下江陵

江陵を下り

順流而東也

流れに順いて東するに方りてや

舳艫千里

舳艫千里

旌旗蔽空

旌旗空を蔽う

釃酒臨江

酒を釃いで江に臨み

橫槊賦詩

槊を横たえて詩を賦す

固一世之雄也

固に一世の雄なり

而今安在哉

而今に今安くに在りや

正しくすわりなおし、客にたずねた。

「どうしてそのように悲しげに吹くのですか」と。

客は答えた。

「月は明るく、星はかすかに、かささぎは南へ飛ぶ…。

これは曹操の詩ではありませんか。

西に夏口を望み、

東に武昌を望めば、

山や川がぐるりと取り囲み、

草木がこんもりと茂るこの

あたりは、それこそ曹操が周瑜に苦しめられたところで

はありませんか。

曹操は荊州を破り、

江陵より下り、長江の流れを下って、

東に向かうそのとき、船へさきとともに千里の長さにつづき、軍旗は空をおおうほど。

酒を川にそそいで水の神をまつり、ほこを横たえて詩を賦したのです。

まことに一世の英雄です。しかし、いま彼はどこに在りやというのでしょうか。

況吾与子

況んや吾と子と

漁樵於江渚之上

江渚の上に漁樵し

侶魚鰕而友麋鹿

魚鰕を侶として麋鹿を友とし

駕一葉之扁舟

一葉の扁舟に駕し

拳匏尊以相属

匏尊を挙げて以て相属め

寄蜉蝣於天地

蜉蝣を天地に寄す

眇滄海之一粟

眇たる滄海の一粟なるをや

哀吾生之須臾

吾が生の須臾なるを哀しみ

羨長江之無窮

長江の窮まり無きを羨む

挾飛仙以遨遊

飛仙を挾んで以て遨遊し

抱明月而長終

明月を抱いて長えに終えんこと

知不可乎驟得

驟かには得べからざるを知り

託遺響於悲風

遺響を悲風に託せりと

蘇子曰

蘇子曰く

客亦知夫水与月乎

客も亦た夫の水と月とを知れるか

逝者如斯

逝く者は斯の如くにして

而未嘗往也

而も未だ嘗て往かざるなり

盈虚者如彼

盈虚する者は彼の如くにして

而卒莫消長也

而も卒に消長する莫きなり

蓋將自其變者而觀之

蓋し將た其の變する者よりして之れを觀れば

則天地曾不能以一瞬

則ち天地も曾て以て一瞬たること能わず

まして、私とあなたは、長江のほとりで、魚をとり、木を伐り、

魚やえびを仲間とし、大鹿や小鹿を友とし、ひとひらの小舟に乗り、

瓢箪や徳利をとって酒を勧め、

かげろうのように短い一生を天地に託する、大海原のほんの小さな一粒の粟みたいなものなのですから、なおさらのことです。

自分の一生の短いことを悲しみ、長江の尽きることをないのを羨ましく思います。

空を飛べる仙人といっしょに遊び、明月とともに永遠の命を得ることなど、すぐにはかなえられないことを知って、この心を笛の音にこめ、悲しみをさそう風に託したのす。」

私は言った

「あなたはあの水と月とを知っていますか。

川の水はこのように流れてゆきますが、行ったきり無くなったりはしません。

空の月はあのように満ち欠けしますが、けっして消えて無くなったりはしません。

思うに、その変化する点から見れば、天地は一瞬たりともそのままではいられません。

自其不變者而觀之 其の變ぜざる者よりして之れを觀れば

則物与我皆無尽也 則ち物と我と皆尽くる無きなり

而又何羨乎 而るを又た何をか羨まんや

且夫天地之間 且つ夫れ天地の間

物各有主 物各おの主有り

苟非吾之所有 苟も吾の有する所に非ずんば

雖一毫而莫取 一毫と雖も取る莫れ

惟江上之清風と 惟だ江上の清風と

与山間之明月とは 山間の明月とは

耳得之而為声 耳之れを得て声を為し

目遇之而成色 目之れに遇いて色を成す

取之無禁 之れを取れども禁ざる無く

用之不竭 之を用うれども竭きず

是造物者之無尽蔵也 是れ造物者の無尽蔵なり

而吾与子之所共適 而うして吾と子との共に適する所なりと

客喜而笑 客喜びて笑い

洗盞更酌 盞を洗いて更に酌む

肴核既尽 肴核既に尽きて

杯盤狼籍 杯盤狼籍たり

相与枕藉乎舟中 相与に舟中に枕藉して

不知東方之既白 東方の既に白むを知らず

だが、その変化しない点から見れば、物も私も尽きることはないのです。

それなのに、何を羨んでいるのですか。

さて、天地の間の、物には、それぞれ所有主がいます。

かりそめにも私の所有する物でないならば、

一本の毛さえも取ってはいけません。

けれども、長江の上に吹く清い風と、山の間で明るい月と

だけは、

耳で聞いて風の音と聞きとり、目で見て月の色と見て取っても、

それらを取っても禁ずる人はいないし、使っても無くなったりはしません。

これこそ造物の神が与えてくださった尽きせぬ倉で、私とあなたといっしょに楽しむものです。」

客は喜んで笑い、杯を洗い、あらためて酒を注いだ。

酒のさかなはもう無くなり、杯と皿とが散らかり放題。

お互いに枕にし合って眠り、東の空がもう白みかかっているのもわからなかったことである。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久より抄出